続・保育の中の小さなこと大切なこと ②

守永英子

一学期も半ばともなると、年長組の子どもたちの生活は、かなり落ち着きを見せてくる。昨年は、子どもたちの間にいさかいが多く、グループがすぐに決裂してしまって、遊びが続かなかったこのクラスも、やっと、年長組らしい様相をみせて、グループの人数もふえ、遊びも続くようになってきた。

このような五歳児のある日、「鉄棒するの見て」とA子に誘われ、二、三人の女の子と連れ立って、庭へ出た。初夏の明るい日差しを浴びて元気に遊んでいる子どもたちの中に、足を投げ出し、地面にすわりこんでいる、小柄なS郎の姿が見えた。向い合ってしゃがんでいるのは、K夫。話し合っているらしい二人のそばを通りながら、「何してるの？」と声をかけた。ちらりと視線を向けたS郎の顔は、明らかに不快を表わしていた。〃K夫との間に、何かあったのだろうか？〃という思いで、K夫を見ると、彼は、困ったような、照れたような、あいまいな表情で、ちょっと笑った。

あまり緊迫した状況ではなさそうなので、その場は二人に任せて、私は、A子に従った。気になって、鉄棒のところから二人を見ていたが、一向に遊び出す様子がない。

〃何とかした方が、よいのかもしれない〃と判断して、二人に近づき、「どうしたの？」と私が尋ねたときには、S郎の気持は、すっかりこじれてしまっていた。おそすぎた私の関心を、振り切るように、「幼稚園なんかつまらない。もう幼稚園なんか来ないから！」とつぶやくと、S郎は保育室の方へ戻って行った。K夫も、それをしおに、解放されたように、山の方に駆けて行った。察するところ、K夫は、事情を知らないまま、気持をこじらせているS郎の慰め役も務めて

いたようである。

私の介入を拒んで、立ち去ったS郎。〃もう幼稚園なんか来ない…〃という言葉が、私の胸に突き刺さっていた。事情を知る手がかりもないまま、私は、働きかける方向を模索しながら、保育室に戻った。S郎は、引出しの前にうずくまっていたが、私の姿に気づくと、避けるように、引出しの方を向いた。私は、声をかけることをあきらめ、彼の好きな本を二、三冊選んで、少し離れて床に腰をおろした。彼が拒否する必要のない程度に、距離を保ったのである。

保育室の中には、子どもが少なかった。この瞬間を、もし、人が見たならば、奇妙な光景であったろう。ままごとで遊んでいる子どもが三、四人と、引出しの前に、ひとりでうずくまっている子どもと、ひとりで絵本をひろげている保育者と……。しかし、私の不安定な状態は、すぐに周囲に集ってきた子どもたちによって救われた。子どもたちは絵本に関心を示し、口ぐちに意見や、知識を述べた。私は、ほっとすると同時に、子どもたちによって、S郎との間がさえぎられたことが気になった。絵本を読みながらも、気持はS郎の方に向かっていた。

子どもたちと私とのやりとりに刺激されたのだろうか。気がつくと、集った子どもたちの輪の中にS郎の顔があった。自分から、絵本の見える位置に移動してきたのである。そして絵本について何か言っているS郎の声を聞きながら、私は、ほっと、胸をなでおろした。二冊目を見終る頃には、S郎の表情はすっかり明るくなり、「外に行こう」と元気に出て行った。少し経って、庭を見渡すと、ベランダで高鬼をしている子どもたちのグループの中に、S郎の姿が見られた。

大人は、〃お友だちとは仲良くしなさい〃と、たやすく言う。しかし、発達の途上にある幼ない子どもたちにとっては、生やさしいことではない。強者に従えば、外見の平和は保たれるが、自分の意志を持ちながら、周囲と折り合っていくことは、むずかしい。その間に、心が傷ついたり、くじけたりすることは間々あることである。そういうとき、周囲がすべてうとましいものとなっても、どこかに必ず自分を支えてくれるものがあると信じられる——そういうところに、幼稚園をしておきたいものと、私は願っている。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）